

## 39 江戸期河内地方の儒医たち その日常生活について

田中 祐尾

大阪市立大学医学部

1615年大坂夏の陣で荒廃した大坂の町は約1世紀を経て見事に商工業の町として復興発展するがこの土農工商の階級社会を経済的に支えたのが河内地方を主とする農業の豊かさであり其の元は淀川と大和川の水利の開発であった。もともと気候温暖で豊かな土壌の河内地方の米・綿・菜種の豊穰な商都大坂への供給はこの地の農民商人を主とした庶民階級に適度の富と生活の余裕をもたらして18世紀初頭には学問の興隆が起こるに至る。平野含翠堂・今橋懐徳堂といった儒学校の前身が始まって全国の逸材が儒学を学ぶために蝟集する。元来豊かな生活と健康志向は不即不離のものだがそういった階層の人々は挙ってこれら儒塾に集まり、中でも中国医書を主流とした当時の医学を学ぶには儒学からのアプローチが必須であった。18～19世紀大坂の庶民たちの識字率は六割を超え、幼児から始まる寺子屋の数が二千以上あったという事実がそのまま学問の興隆期だったことを物語っている。

河内若江郡八尾東郷村田中彌性園文庫には八代当主元緝（モトツグ）（1767～1825）の時代すでに千数百冊の医学書を蔵していて九代元資（モトタカ）と共に懐徳堂の中井竹山、履軒らに学んでいた。七代元允（モトノブ）は地元の医師重岡見昌らと全国物産会（ブッサンエ）の河内地方のネットワークに加わり大坂堀江の木村兼葭堂らと交わって薬品や医学書のルートを得、兼葭堂は顕微鏡を模造していた。漢詩吟行の村医者たちのネットワークもあった。久宝寺村安田春益・大田村桑野喜庵・瓜破村舟木杏庵・川辺村竹島浩庵といった概ね三十歳代の在郷医の面々で寛政元年の詩集には田中元緝二十三歳の記載あり。寛政八年（1796）元緝は父元允の死に際して家宗を仏教浄土宗から儒教に改宗し以後田中家は土葬による儒墓地を子孫に継承して昭和にまで至る（八尾大窪来迎寺）。

大坂への水路による盛んな交易品の出入りは長崎から瀬戸内航路を経由した疫病の通路でもあって特に新種の海外のコレラ・天然痘・流感といった罹患に対する防疫行政や医療は殆ど無力で流行の都度多くの死者が出て死体を焼く薪も払出し埋める人力も不足、大川へ放り込んだ死体が河口を塞ぐといった有様だった。医師たちは必死に薬の処方考案し薬草薬物を求め、経験的知見としての煮沸消毒や天日干し、時には強制隔離といった手段など、必死に疫病と戦うが組織としての力はなく人々は絶望の底に喘いだ。だが数パーセント以下の確率で、免疫学的にまたは栄養に恵まれた数人が居て、それが奇跡的に救命された妻や子であった場合、医師の存在はまさに神仏の域を超えたものとなる。村人たちにとっての心の拠り所は知的レベルのアップがあったため絶望の淵での従来の神頼みではない唯物的な医学への希望、そして平時の健康志向、そういった思想がこの地方に芽生え大坂の地は明治まで、あらゆる医学医療の治験の場となるのである。医師（ここでは儒医）への精神的依存はその人格への純化が求められた。幸いに儒学とは孔子の教えによる人格の高揚がその教義だから儒医は本来『仁』に悖る日常であってはならなかった。とはいえいつもが聖人君子ではいられず、中国明清時代の士大夫（シタイフ）・朝鮮李王朝の両班（ヤンバン）といったさほど偉くはない儒教の身分、我が国でいえば武士階級の身分を真似た彌性園の医師たちは、漢詩を詠み、煎茶道を選び、四君子を描き、玉細工を試みるといった儒教由来の趣味によって息抜きをした。以上儒医の日常生活のあらましに彌性園儒墓風景、漢詩集『赤水稿』（田中元緝・元資）、『家禮』（浅見綱斎）、『大日本史』（水戸光圀）、『彌性園方函』（田中元緝・元資）、『彌性園大工図』、『彌性園六勝』、『神農図』、『診療録』（安政7～慶応4年）、『手術記録』（明治11年）、『兼葭堂書状』（寛政年間）『御国米免除願書』（田中元緝・寛政年間）など映像を示し推論する。